

導入期（5～7歳）におけるピアノ演奏指導のための教材開発：
鍵盤対応カードの開発と活用事例

黒 田 美 絵

Development of Teaching Materials for Elementary-Level Piano Learners:
Corresponding card for Keyboard and Its Application to Practical Piano Education

Mie Kuroda

Reading music is essential for elementary-level piano learners ages five to seven. “Keyboard corresponding card” which enable learners to read music easier has been developed and applied to a musical education in “Lemie Music Academy”. “Keyboard corresponding card” is an innovative teaching material that learners can understand instantly the positional relationship between the keyboard and the grand staff of the piano.

Effective practical use of keyboard corresponding cards is also introduced. This study found that by leveraging the “Keyboard corresponding cards” to the learner, a high learning effect can be obtained.

Educational method with these teaching materials should be called “Lemie Method”.

キーワード

ピアノ教育 Piano Education, ソルフエージュ Solfeggio, 読譜 Reading Music, 鍵盤 Keyboard,

所属

レミエ音楽院 Lemie Music Academy

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 音楽学科 Department of Music

1.はじめに

ピアノ教育を行う場合、近年では様々な優れた指導法、教材、教本がある。「ピアノを演奏する」ということは、五線紙より音符を認知し、瞬時に対応した鍵盤上の位置を把握し、鍵盤を打鍵する行為を同時に行うことである。しかしながら、導入期（5～7歳）の学習者において、ピアノの楽譜を理解し、読み、演奏することは容易ではない。¹⁾

そこで、学習者にピアノを演奏するために必要な「読譜力」を身につけさせるためには、大まかに3つのピアノ指導法が考察される。

① ソルフエージュ教育において「読譜力」を身につけさせた後に、ピアノ（鍵盤楽器）を指導する方法

- ② ピアノ演奏指導を行いながら同時にソルフエージュ教育「読譜力」を身につけさせる方法
- ③ ピアノ演奏指導を中心に行い、特別に「読譜力」については指導しない方法

本報では、導入期（5～7歳）の学習者に対して、ピアノ演奏指導を行いながら同時に「読譜力」を身につけさせる方法について研究した。そこで、楽しく容易に「読譜力」を体得できる補助教材「鍵盤対応カード」の開発を行い、効果的なピアノ指導活用方法について紹介する。

2.「鍵盤対応カード」の開発

導入期（5～7歳）の学習者にとって、五本

の線のどこに音符があるのかを正確に認知し、それに対応するピアノ鍵盤を打鍵することは難しい。たとえば、音符が五線の第二線の上にあるのか、第三線の上にあるのかを瞬時に判別できない。¹⁾

また、ピアノ鍵盤は右側に向かうほど高音になり、左側に向かうほど低音になる。それに対応して、五線譜では上部分に向かうほど音が高くなり、下部分に向かうほど低い音をあらわす。つまり、楽譜の上側が鍵盤の右側と対応し、下側が鍵盤の左側と対応していることは導入期の学習者には理解しにくい。¹⁾

そこで、筆者はピアノ楽譜と鍵盤の位置関係を即時に理解できる教材「鍵盤対応カード」を開発した。「鍵盤対応カード」は既存のピアノ教本と併用して使用する。

ピアノ楽譜は通常、大譜表である。導入期の学習者にとって大譜表を一度に理解するのは困難である。そのため「鍵盤対応カード」は「高音部譜表用カード」4枚と「低音部譜表用カード」4枚に分けて学習し、最後に「大譜表用カード」4枚を活用する方法をとった。

まず、「高音部譜表用カード」について説明する。

(1) 「高音部白鍵色付きカード」

ピアノの白鍵盤12個と同じサイズの白鍵を記したカードを用意する。この白鍵カードに便宜上色をつける。左から白、白、緑、白、青、白、ねずみ、白、黄、白、オレンジ、白色とする。つまり、e1=緑色、g1=青色、h1=ねずみ色、d2=黄色、f2=オレンジ色に作成する。



図1 高音部白鍵色付きカード

(2) 「高音部色付き五線カード」

高音部譜表の第一線=緑色、第二線=青色、第三線=ねずみ色、第四線=黄色、第五線=オレンジ色とし、五線の線は通常より五倍くらいの太さとする。

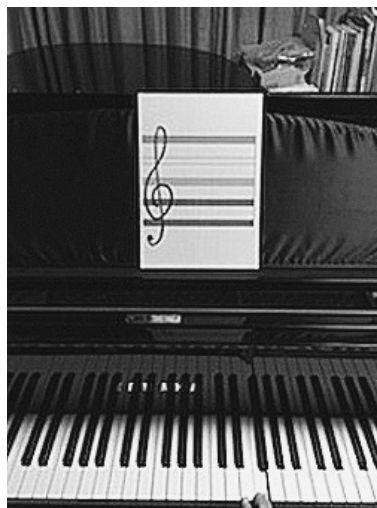


図2 高音部色付き五線カード

(3) 「高音部少色付き五線カード」

(2)の五線の色を第一線～第五線の左側3/4を黒色にし、右端の1/4程度を(2)と同じように色付きにする。



図3 高音部少色付き五線カード

(4) 「高音部黒五線カード」

(3)の高音部譜表にて五線をすべて黒色にする。



図4 高音部黒五線カード

次に「低音部譜表用カード」について説明する。

(1) 「低音部白鍵色付きカード」

ピアノの白鍵盤12個と同じサイズの白鍵を記したカードを用意する。この白鍵カードに便宜上色をつける。左から白, 白, 青, 白, ねずみ, 白, 黄色, 白, オレンジ, 白, 紫, 白色とする。



図5 低音部白鍵色付きカード

(2) 「低音部色付き五線カード」

低音部譜表の第一線=青色, 第二線=ねずみ色, 第三線=黄色, 第四線=オレンジ色, 第五線=紫色とし, 五線の線を通常より五倍くらいの太さとする。



図6 低音部色付き五線カード

(3) 「低音部少色付き五線カード」

(2)の五線の色を第一線～第五線の左側3/4を黒色にし, 右端の1/4程度を(2)と同じように色付きにする。



図7 低音部少色付き五線カード

(4) 「低音部黒五線カード」

(3)と同じ低音部譜表にて五線をすべて黒にする。



図8 低音部黒五線カード

「大譜表用カード」について説明する。

(1) 「大譜表白鍵色付きカード」

白鍵盤24個を作成し、左より、白、白、青、白、ねずみ、白、黄、白、オレンジ、白、紫、白×3個、緑、白、青、白、ねずみ、白、黄、白、オレンジ、白色とする。つまり、G=青色、B=ねずみ色、d=黄色、f=オレンジ色、a=紫色、e1=緑色、g1=青色、h1=ねずみ色、d2=黄色、f2=オレンジ色に作成する。

(2) 「大譜表色付き五線カード」

大譜表の下段の五線、へ音記号部分は第一線G=青色、第二線B=ねずみ色、第三線d=黄色、第四線f=オレンジ色、第五線a=紫色で表示する。上段の五線、ト音記号部分は、第一線e1=緑色、第二線g1=青色、第三線h1=ねずみ色、第三線d2=黄色、第四線f2=オレンジ色で表示する。



図9 大譜表色付き五線カード

(3) 「大譜表少色付き五線カード」

大譜表の右端1/4の色を(2)と同様にし、残りの上・下段とも五線はすべて黒にする。



図10 大譜表少色付き五線カード

(4) 「大譜表黒五線カード」

大譜表のすべての五線を黒色で表示し、ト音記号、へ音記号、括弧とも記入する。



図11 大譜表黒五線カード

3. 「鍵盤対応カード」の活用事例

「鍵盤対応カード」を活用するにあたって「リズムカード」²⁾と同じように、短時間でできたという満足感と達成感を学習者に持たせることが大切である。また、楽譜に対する苦手意識を取り除き、楽譜と鍵盤との対応が瞬時に可能になることを目的とする。

〔「鍵盤対応カード」活用方法1〕

学習者：1名～2名

指導者：1名

用意するもの：「高音部譜表用カード」4枚、ピアノ。

注意点：学習者は右手でピアノ鍵盤を弾く。実施時間は短時間にとどめ、飽きる前にやめる。

方法：

- ① 「高音部白鍵色付きカード」図1をピアノの鍵盤に合わせる。カードの一番端の白い鍵盤をc1に合わせて、色をe1 = 緑色，g1 = 青色，h1 = ねずみ色，d2 = 黄色，f2 = オレンジ色になるようにセットする。



図12 高音部白鍵色付きカード

- ② 指導者が「緑色は?」「オレンジ色は?」と学習者に尋ねて、対応したピアノ鍵盤を押させる。五色とも演習する。このとき指導者は「ミ」「ソ」「シ」のように音名を言わない。
- ③ 「高音部白鍵色付きカード」の向きを縦にし、譜面台に置く。
※緑色を下側，オレンジ色を上側にする。



図13 高音部白鍵色付きカード

- ④ ②と同じように「緑色は?」「黄色は?」と問題を出し、対応した音をピアノ鍵盤で弾かせる。

このとき、学習者は目の前の「白鍵色付きカード」と鍵盤が対応していることに気がつかせる。

- ⑤ 「高音部色付き五線カード」をピアノ譜面台に置き、指導者が「緑色は?」「ねずみ色は?」と問題を出し、学習者に鍵盤を弾かせる。(図2参照)
- ⑥ 第一間など楽譜上の白い部分についても鍵盤を弾かせる。色の部分と鍵盤の位置が把握出来ていれば、楽譜上の間の鍵盤も容易に理解し位置が理解できる。
- ⑦ 指で指示していたものを黒い磁石の玉に換えて、音符とする。同じ質問を繰り返す。
- ⑧ 「高音部少色付き五線カード」に差し替え、同じ演習を行う。(図3参照)
- ⑨ 黒玉の位置を第一間，第二間へと、範囲を広げていくことにより，第一線より第五線までのすべての音符と鍵盤は対応可能になる。
- ⑩ 「高音部黒五線カード」を使用し，第一線 = e1，第二線 = g1，第三線 = h1，第四線 = d2，第五線 = f2，第一間 = f1，第二間 = a1，第三間 = c2，第四間 = e2 などランダムに黒玉を置き、それを見ながら鍵盤を弾かせる。(図4参照)
- ⑪ 応用編として，加線を下第一線，上第一線と広げていくことにより，すべての音符と鍵盤の対応が可能になる。

「鍵盤対応カード」活用方法2]

学習者：1名～2名

指導者：1名

用意するもの：「低音部譜表カード」4枚，ピアノ。
注意点：学習者は左手でピアノ鍵盤を弾く。短時間にとどめ，飽きる前にやめる。

方法：「高音部譜表用カード」と同様の手順で活用する。(図5～8参照)

「鍵盤対応カード」活用方法3]

学習者：1名～2名

指導者：1名

用意するもの：「高音部譜表用カード」「低音部譜表用カード」「大譜表用カード」各4枚。
注意点：「高音部譜表カード」，「低音部譜表用カード」は一部を省略して実施しても良い。

方法：「高音部，低音部譜表用カード」と同様

の手順で活用する。(図9～11参照)

〔鍵盤対応カード〕の活用事例1〕

対象：A君（5歳男の子，幼稚園児）

活発で塗り絵を好み，ピアノ練習はあまり好きではない男の子である。リトミックを4歳児より開始し，5歳よりピアノを習い始めた。

自宅楽器：ピアノ

使用教本：「ゴーゴーピアノ」1～3巻³⁾

使用教本の特徴：楽譜が横開きで大きく小さな子どもにも見やすい。一曲が右ページにはリズムのみ記載されており，左ページには音符のみ表示されている。曲の長さは4小節から8小節。c1からg1までの繰り返しが続く，反復練習が出来るよう工夫されている。

6月

「鍵盤対応カード」より「高音部譜表用カード」を使用し，活用方法の①～⑩を部分的に実施した。

時間は5分程度で実施する。それ以上行うと嫌になるのですべての行程はできない事も多かった。

7月

「鍵盤対応カード」より「高音部譜表用カード」4枚を使用し，活用方法の①～⑩まで実施した。慣れてくるので③，④，⑤，⑦は省略した場合もあった。

8月

「鍵盤対応カード」より「高音部譜表用カード」「低音部譜表用カード」とも各4枚ずつ使用し，活用方法の①～⑪まで実施した。

9月

「鍵盤対応カード」より「大譜表用カード」4枚を使用し，実施した。現在使用中のピアノ教本には出てこない音符も多いが，

Eからa2までの音と鍵盤との対応を正確なものにした。

〔鍵盤対応カード〕の活用事例2〕

対象：A子ちゃん（7歳女の子，小学校1年生）おとなしく内気な性格。習い始めて1年。

自宅楽器：ピアノ

使用教本：「レミエメソッド」

使用教本の特徴：童謡など知っている曲に学習者に合った伴奏が付いているので，親しみやすく練習へのやる気が起こりやすい。

6月

「鍵盤対応カード」より「高音部譜表用カード」4枚を使用し，①～⑪までを実施した。

簡単なので楽しく，夢中になる。同級生と遊びながらゲーム感覚で行うと効果的である。

7月

「鍵盤対応カード」より「高音部譜表用カード」「低音部譜表用カード」各4枚を使用し，①～⑪を実施した。c1からa2までの音と鍵盤との対応を正確なものになった。

8月

「鍵盤対応カード」より「大譜表用カード」4枚を使用し，①～⑪までを実施し，E～a2までの楽譜と鍵盤が対応できるようになった。

〔実績結果〕

「鍵盤対応カード」の活用により，学習者はピアノ楽譜とピアノの鍵盤の位置が完全に把握できた。このことにより，結果的に「読譜力」がついた。そして，新曲のピアノ演奏をするとき，「初見力」がつき，音の間違いが少なくなった。

また，音域が広い曲も演奏可能となり，学習者が演奏したい曲を練習曲として選択できるようになった。

「鍵盤対応カード」は即効性があるので，現在学習している曲への応用が可能である。

〔体験した学習者の感想〕

学習者へ「鍵盤対応カード」の体験後アンケートをとった。

アンケート内容：「鍵盤対応カード」を実施したあとに思った事，感じた事を教えてください。

アンケート結果：

- ①楽譜が全部覚えられた感じがした
- ②楽譜が簡単だと感じた
- ③楽しかった
- ④大譜表は難しかった
- ⑤面白かった

「鍵盤対応カード」を実施後の正解率に関わらず，楽しかったという感想が多かった。学習者にとってはゲーム感覚のようである。

4. まとめ

ピアノ教育において「鍵盤対応カード」の活用により，学習者は楽譜を理解し，鍵盤の位置を正確に弾くことが容易になった。そのため新曲に入ったときに楽譜を読むことへの恐怖心や

面倒だという嫌悪感が少なくなった。そして、日々のピアノ練習が楽しいものへと変化し、意欲的に練習してくるようになった。また、曲の仕上がりも早くなり、レパートリーが次々に増えていった。

以上、8名の被験者に対して実施し、学習効果を得る事ができた。

学習者は楽譜を読み、鍵盤を弾くことは難しいという認識から、楽譜が単なる鍵盤と対応した表記であるという認識を新たにした。そして「楽譜は難しくはない」という認識のもと「読譜力」を養うことにより、ピアノ演奏が容易になれば、学習者自身も楽しく学ぶことが可能となる。

近年において導入期（5～7歳）の学習者は、「楽しく行うこと」で体得したいことが飛躍的に上達したり、理解力や吸収力をアップさせることができることが脳科学的にも証明されている。²⁾

導入期（5～7歳）の学習者へのピアノ演奏指導において「鍵盤対応カード」を活用することにより、高い学習効果が得られることを本研究では明らかにした。

「リズムカード」²⁾とともに併用すれば、さらなる学習効果が期待できる。

本研究ではピアノ演奏指導を導入期（5～7歳）で行ったが、「鍵盤対応カード」は高音部

譜表や低音部譜表が苦手な学生、また大人の初心学習者などにも活用が期待できる。「ド」「レ」「ミ」と数えて読む手法では、「読譜力」をつけるのに時間がかかる。また、それを鍵盤に置き換えピアノを弾く行為には、忍耐力と長時間の練習を必要とする。この「鍵盤対応カード」を活用する事により、短時間でピアノ楽譜の五線上の音符をほぼ理解可能となる。

「鍵盤対応カード」は、ピアノ教育指導のみならず、今後はソルフェージュ教育、声楽、またその他の楽器演奏への指導ツールとして、幅広く活用されることが期待される。

科学研究費補助金(奨励研究)課題番号24907039
研究代表者：黒田美絵
により行った研究である。

参考文献

- 1) 大野桂『ピアノ初歩指導の手引き』音楽之友社、1981、pp 9-19
- 2) 黒田美絵『導入期（5～7歳）におけるピアノ演奏指導のための教材開発』広島文化学園学芸大学紀要第2号、2012、pp123-130.
- 3) 遠藤蓉子『ゴーゴーピアノ』1～3巻、サーベル社、2013、